

## 高校選択要因と学校適応の関連

A relationship between high school selection factors and school adjustment

藤原 優輝

Yuki Fujiwara

### 要 旨

本研究では私立高校1年生を対象に、高校選択要因と学校適応の関連を検討した。高校選択要因による生徒の類型化をおこない、5群に分類した。5群の学校適応得点を比較した結果、複数の高校選択要因を持つ群の学校適応得点が高いことが示された。

また、群ごとの重回帰分析では全群で「友人とのつながり認知」が学校適応と最も強い関連を示した。さらに「部活動重視群」では「教師のサポート認知」が、「全重視群」では「学習上の努力要請認知」が学校適応と関連していることが示され、生徒のタイプによって適応への支援領域が異なることが示された。

キーワード 学校適応, 高校選択, 進路, 友人, 部活, 私立高校

### 1.問題と目的

文部科学省の令和元年度「学校基本調査」(文部科学省,2020)によると令和元年度の高校進学率は98.8%となっており、近年は同程度の高水準で推移している。ほぼ全ての中学3年生が高校進学を選択しており、高校生活を適応的に送れるかどうかは多くの生徒にとって非常に重要なこととなっている。

永作・新井(2005)は自律的高校進学動機と学校適応・不適応の関連について、無動機づけ状態で高校に進学することが、その後の不適応感につながる可能性が高いことを示している。しかし、前述したように多くの生徒が高校進学を選択するなかで、高校進学に対する動機を明確に持つことなく、高校進学を前提とした進路決定が行われている。このような状況の中、受験校選択について考えると、たとえ高校進学に対しては明確な動機がなくとも、受験校決定の際には、数ある選択肢の中から高校を選んでおり、その選択には何らかの動機があると考えられる。山本(2011)では高校卒業後の進学実績や、入学後の部活動、通学のしやすさといった高校の選択要因が示されている。そこで、本研究では高校選択の際に重視した高校選択要因について調査し、その回答をもとに高校生の類型化をおこなった。その上で、それぞれの類型で学校適応にどのような差があるか、さらに学校適応を支

える要因について検討した。入学前の要因をもとにその後の学校適応を検討することで、より早期からの適応への効果的な支援を示したい。

ここで本研究での学校適応の概念について述べておく。岡田(2015)は適応概念には様々な側面があり、どこに重点を置くかは研究者によって異なることから、必ずしも統一的な見解が得られているとはいえない状況にあると指摘している。大久保(2005)はこれまでの研究の多くは学校環境が求める要因を研究者側が設定している、と指摘しており当該の学校環境で何が重視され、それに対して生徒がどのように感じているかは考慮されていないと述べている。生物学的な適応とは異なり、学校という特殊な環境における多様で多数の生徒の適応を考えるうえでは、この指摘は重要な視点と考えられる。実際の学校現場では、同件事象が起こっても生徒によって捉え方が違うことは日常であり、またその捉えたことに対してどのように感じるかも様々である。これらのことを踏まえ、本研究での学校適応は「個人が環境と適合していると意識していること」(大久保・青柳, 2003)と捉え、生徒が学校環境を主観的にどのように感じているかに重点を置いた。

学校適応を支える要因について大久保(2005)は、多くの研究では学校適応を対人関係(「友人との関係」と「教師との関係」)と「学業」の側面から捉えているが、この3側面は学校適応そのものというよりも、適応感を規定する学校生活の要因と考えられる、と指摘している。本研究でもこれら3側面を入学後の適応を支える要因として捉えた。これらの3側面に対し、学校環境から要請されているものをどの程度認知しているか、つまり在籍高校の雰囲気に対する認知を測定し要因として用いた。

調査対象としたのは私立高校の1年生であるが、それは以下の理由からである。文部科学省の令和元年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省, 2020)によれば、高等学校における不登校は50,100人で在籍者数の1.6%を占める。不登校者数の学年別の数値をみると、高校1年次は12,778人であり、2年次11,727人、3年次9,517人と比べ最多となっている。高校1年次は学校移行直後の時期で、それまでの環境と大きく変わることになり、その後の高校生活を適応的に送るうえで、重要な時期である。また、私立高校では進学実績や部活動実績をはじめ、各学校独自の経営戦略の元、選択される学校を目指しており、選択した生徒には明確な高校選択要因があると考えられる。

上述のことを踏まえ、本研究の目的を整理すると、次の2点である。1点目は高校選択要因によって生徒の類型化をおこなった上で、グループごとの学校適応への差異を明らか

にすることである。2点目は入学前の高校選択要因で類型化した生徒らの、入学後の学校適応を支えているものを明らかにすることである。グループごとに支える領域の違いを示すことで、生徒のタイプに応じた適応への支援をより明確なものにしたい。

## 2.方法

### 2.1 調査の概要

A 県の私立高校 2 校の 1 年生を対象に質問紙法による無記名の調査を 2019 年 11 月に実施した。有効回答 593 名(B 校 208 名, C 校 385 名)で, うち男子は 310 名, 女子は 283 名, 無回答 2 名であった。LHR の時間内の約 15 分, 担任教師により実施された。B 校・C 校ともに男女共学, 国公立大学進学を目指すコースから短大・専門学校への進学を目指すコースまで複数の学科・コースがある。部活動では文化部から運動部まで幅広く活動があり, 全国大会へ出場する部活動がある。両校とも全コースの生徒から協力が得られた。

### 2.2 質問紙の内容

#### ①学校適応尺度

古市・玉木(1994)の学校享受感尺度と河村(1999)の学校生活満足感尺度を用いた。両尺度を用いることで, 学校生活の多くの場面をカバーでき, 高校生でも回答しやすく生徒の主観的な適応感を測定できるためである。不適応感を測る項目中に直接的な表現が含まれるものは除外した結果, 15 項目となった(項目は Table 1 を参照)。調査用紙では「今のあなたの学校での生活についてお聞きます。あなたは以下の点にどの程度あてはまりますか。」と教示し, 「5. よくある」「4. ときどきある」「3. どちらともいえない」「2. あまりない」「1. 全くない」のいずれかに○をつけさせた。

#### ②高校選択尺度

中学 3 年次に高校選択の際に何を重要視していたかを測定した。山本(2011)の進路情報ニーズの質問項目をもとに各因子で負荷量の低いものと, 進路情報として入手しづらいものを除外し, 自身の学業成績に関する独自の質問項目を 1 項目加え, 18 項目を用いた(項目は Table 2 を参照)。「中学生の時をふりかえってみて, 現在の高校(類型・コース)を選ぶ決め手になったものとして, 下の各情報がどの程度大切だと思っていましたか。」と教示し, 「5. とても大切」「4. 大切」「3. どちらともいえない」「2. 大切でない」「1. 全く大切でな

い」のいずれかに○をつけさせた。

### ③学校雰囲気尺度

大久保(2010)の学校環境からの要請尺度を用いた。在籍している高校から要請されていると感じるもの、つまり学校の雰囲気を尋ねるものとなっている(項目はTable 5を参照)。

「今のあなたの学校の校風や雰囲気や、あなたの学校で求められていることについてお聞きします。あなたの学校では以下の点にどの程度あてはまりますか。」と教示し、「5. 非常にあてはまる」「4. あてはまる」「3. どちらともいえない」「2. あてはまらない」「1. 全くあてはまらない」のいずれかに○をつけさせた。

## 2.3 倫理的配慮・分析ソフト

配布した質問紙の冒頭に、調査の主旨、倫理的配慮について記載した。また実施の際には担当教師から倫理的配慮についての説明、机間巡視はしないこと、また、学校での成績には無関係なことなどを口頭で説明するよう依頼した。なお、分析には HAD17(清水, 2016)を使用した。

## 3. 結果

### 3.1 学校適応尺度の因子分析

学校適応に関する質問の評定は大きく偏って分布している項目はなく、全項目で因子分析を行った。最尤法による因子分析解にプロマックス回転を施した結果をTable 1に示す。因子負荷量が.40以上を基準に5項目を削除し、3因子10項目を採用した。第1因子は、学校生活が楽しく充実しているかを表す項目からなっているので、「楽しみ感」因子と命名した。第2因子は、学校生活で独りになる感覚を表す項目からなっているので、「孤立感」因子と命名した。第3因子は、学校生活における積極性を表す項目からなっているので、「積極性」因子と命名した。信頼性係数はそれぞれ $\alpha = .869, .826, .606$ であり、第3因子のみやや低いだが、その制約を踏まえつつ、このまま3因子構造にて分析を続ける。因子間相関は第1因子と第3因子が.544と中程度正の相関があるが、それらと第2因子の相関は-.381, -.310と弱い負の相関となっている。このことから第1・3因子と第2因子ではそれぞれ学校適応のポジティブ・ネガティブな側面を測っていると判断した。

Table 1 学校適応の因子パターン

	I	II	III	$h^2$	Mean	SD
I. 楽しみ感 ( $\alpha=.869$ )						
11.学校では、楽しいことがたくさんある。	.900	.013	-.047	.757	3.73	1.07
9.学校は楽しくて、一日があっという間にすぎてしまう。	.789	.011	.009	.623	3.20	1.18
12.学校は楽しいので、少しくらい体の調子が悪くても学校に行きたい。	.780	.095	.051	.604	3.01	1.21
4.学校生活で充実感や満足感を覚えることがある。	.711	-.138	-.009	.592	3.73	1.04
II. 孤立感 ( $\alpha=.826$ )						
10.私はクラスの中で、孤立感を覚えることがある。	-.006	.923	.092	.812	2.04	1.14
13.私はクラスの中で、人間関係が原因でさみしいと覚えることがある。	-.050	.765	.211	.550	2.15	1.19
8.クラスで班を作るときなど、なかなか班に入れずに残ってしまうことがある。	.100	.717	-.232	.601	2.01	1.09
3.私は休み時間などに、一人でいることが多い。	-.020	.579	-.125	.407	2.31	1.23
III. 積極性 ( $\alpha=.606$ )						
2.私はクラスやクラブの活動でリーダーシップをとることがある。	-.050	.065	.658	.380	2.60	1.10
5.私はクラスで行う活動には積極的に取り組んでいる。	.202	-.070	.588	.557	3.47	1.04
因子間相関						
	I	-.381	.544			
	II		-.310			
1.学校内の友人に自分の本音や悩みを話すことがある。					3.57	1.21
剰 6.私は授業中に発言をしたり先生の質問に答えたりするとき冷やかされることがある。					1.99	1.09
余 7.学校内で私のがんばりを知ってくれている先生がいると思う。					3.21	1.07
目 14.仲の良いグループの中では中心的なメンバーである。					2.90	0.98
15.私はクラスや部活で、まわりの目が気になって不安や緊張を覚えることがある。					2.83	1.31
因子抽出法:最尤法						
回転法:プロマックス回転						

### 3.2 高校選択尺度の因子分析

高校選択尺度の因子分析を行った。各項目の評定に偏りはなく、全項目を用いて最尤法による因子分析解にプロマックス回転を施した。因子負荷量.40以上を基準に、因子負荷量の低かった1項目を分析から除外し再分析した結果、4因子解が得られた。その結果をTable 2に示す。第1因子は、学校の中で守る規則等を重要視するかについて尋ねる項目からなっているので、「学校ルール」因子と命名した。第2因子は、高校卒業後の進路を重要視するかについて尋ねる項目からなっているので、「進路」因子と命名した。第3因子は、全て部活動について尋ねる項目からなっているので、「部活動」因子と命名した。第4因子は、通学を重要視するかについて尋ねる項目からなっているので、「通学」因子と命名した。信頼性係数はそれぞれ $\alpha=.828$ ,  $.838$ ,  $.902$ ,  $.831$ であり、十分な内的整合性が得られた。

Table 2 高校選択要因の因子パタン

	I	II	III	IV	$h^2$	Mean	SD
I.学校ルール( $\alpha=.828$ )							
14.生徒指導の厳しさ	.792	-.164	.019	.044	.592	3.06	0.99
11.服装規程の内容	.680	-.052	.019	.109	.540	3.16	1.05
8.どのような教職員がいるか	.625	.180	-.071	-.072	.432	3.36	1.08
15.補習の有無	.623	.104	-.030	-.020	.424	3.17	1.01
4.校則の内容	.602	.002	.115	.072	.492	3.25	1.01
7.授業の雰囲気	.450	.446	-.059	-.101	.480	3.74	0.95
II.進路( $\alpha=.838$ )							
17.どのような進路が実現できるか	-.120	.924	.029	.015	.786	4.02	0.90
16.自分の将来に役立つ学校か	-.132	.896	.021	.068	.755	4.04	0.89
10.進路希望をかなえるのに有利か	-.009	.725	-.047	.047	.533	3.89	0.92
2.卒業生の進路の状況	.031	.531	.158	-.067	.329	3.82	0.97
18.自分の学業成績	.103	.470	-.088	.073	.293	4.01	0.89
5.授業が大学入試に対応しているか	.245	.431	-.002	-.072	.301	3.57	0.95
III.部活動( $\alpha=.902$ )							
3.部活動の活動のようす	-.008	.027	.921	.011	.856	3.53	1.29
1.どの部活動が強く、活発であるか	-.102	.011	.915	-.030	.766	3.29	1.34
6.部活動の指導の厳しさ	.198	-.012	.744	.015	.717	3.11	1.20
IV.通学( $\alpha=.831$ )							
13.通学にかかる時間	.032	.011	.017	.862	.789	3.61	1.12
9.学校への通学方法	.078	.043	-.031	.745	.641	3.69	1.07
因子間相関	I	.430	.408	.573			
	II		.161	.307			
	III			.225			
剰余項目							
12.部活動の種類						3.35	1.23
因子抽出法:最尤法							
回転法:プロマックス回転							

### 3.3 学校適応と高校選択要因の相関分析

高校選択要因と学校適応との関連をみるために、学校適応 3 因子と高校選択要因 4 因子の相関分析を行った。その結果を Table 3 に示す。学校適応のポジティブな側面を測っている「楽しみ感」「積極性」と高校選択要因 4 因子全てで弱い有意な正の相関がみられ、高校選択要因とその後の高校生活の関連が示された。一方で、ネガティブな側面である「孤立感」とは「進路」のみ弱い有意な負の相関がみられた。

Table 3 学校適応と高校選択要因の相関

	楽しみ感	孤立感	積極性
学校ルール	.223 **	.016	.230 **
進路	.310 **	-.107 *	.325 **
部活動	.191 **	-.066	.273 **
通学	.129 **	.040	.119 **

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

### 3.4 高校選択要因によるクラスタ分析

高校選択要因における因子間相関は、Table 2 に示したように第 1 因子と他の因子間では中程度の正の相関が示されたが、他の因子との相関は弱いものになっている。そこで、第 2 因子「進路」、第 3 因子「部活動」、第 4 因子「通学」を用いてクラスタ分析(Ward 法)を行い、類型化を行った。その結果得られた 5 クラスタ解を Figure 1 に示す。

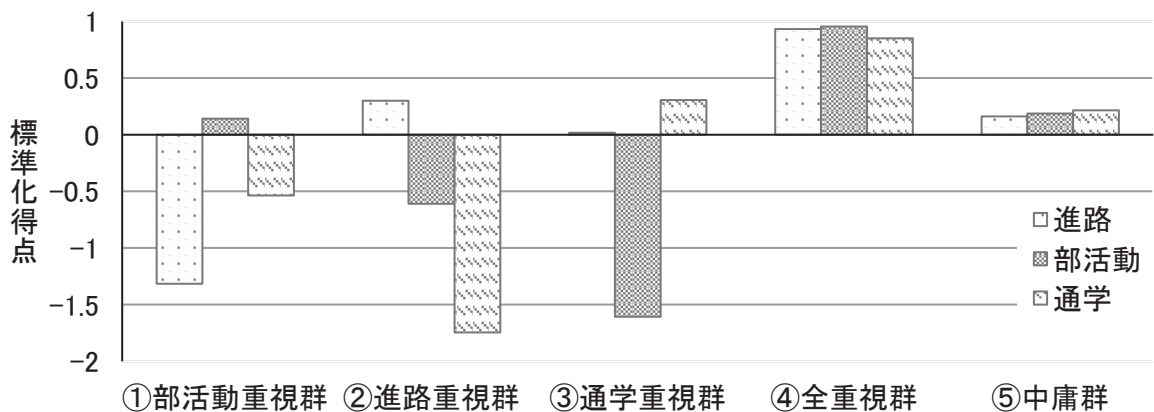


Figure 1 高校選択要因による5クラスタ解

第 1 クラスタは相対的に部活動の因子得点が高いため「部活動重視群」( $n = 117$ )と命名



した。同様に第2, 第3クラスタはそれぞれ「進路重視群」( $n = 57$ ), 「通学重視群」( $n = 78$ )とした。第4クラスタでは他の群より3因子すべての得点が高いため「全重視群」( $n = 108$ ), 第5クラスタでは特徴的な得点が示されていないため「中庸群」( $n = 216$ )とした。

### 3.5 高校選択要因5クラスタによる分散分析

高校選択要因による5クラスタを用いて, 学校適応の3つの下位尺度を従属変数とした分散分析を行った。その結果をTable 4に示す。

Table 4 高校選択要因による5クラスタで学校適応の因子得点を比較

	I. 楽しみ感	II. 孤立感	III. 積極性
①部活動重視群(117)	-0.29 (0.93)	0.07 (0.86)	-0.24 (0.81)
②進路重視群(57)	-0.03 (0.92)	-0.13 (1.01)	0.00 (0.82)
③通学重視群(78)	-0.15 (1.06)	0.00 (0.92)	-0.26 (0.98)
④全重視群(108)	0.36 (0.98)	-0.19 (0.97)	0.38 (0.72)
⑤中庸群(216)	0.04 (0.85)	0.09 (0.96)	0.01 (0.76)
分散分析	$F(4, 560)=7.41, p<.01$	$F(4, 560)=1.95, n.s.$	$F(4, 560)=10.73, p<.01$
多重比較 (Holm法)	4>5>1, 4>2=3		4>5>1, 4>3

平均値とカッコ内はSDを示した

「楽しみ感」( $F(4, 560) = 7.41, p < .01$ )と「積極性」( $F(4, 560) = 10.73, p < .01$ )は有意差が示された。多重比較を行ったところ, 「楽しみ感」では第4クラスタ「全重視群」がどの群に対しても有意に得点が高かった。次いで高いのは第5クラスタ「中庸群」で, 第1クラスタ「部活動重視群」との間で有意差が示された。低得点の3つのクラスタである, 「部活動重視群」・第2クラスタ「進路重視群」・第3クラスタ「通学重視群」間では有意差は示されなかった。

「積極性」でも同様の傾向が示された。「全重視群」は「部活動重視群」「通学重視群」「中庸群」との間で有意に得点が高かった。「中庸群」は「部活動重視群」より有意に得点が高かった。「進路重視群」「通学重視群」「中庸群」間では有意差は示されなかった。

「孤立感」( $F(4, 560) = 1.95, n.s.$ )では有意差は示されなかった。



### 3.6 学校雰囲気尺度の因子分析

学校雰囲気尺度について因子分析を行った。各項目の評定に偏りはなく、全項目で最尤法による因子分析を行い、因子分析解にプロマックス回転を施した結果をTable 5に示す。3因子解が得られ、第1因子は、教師からのサポートを得られると感じているかについて尋ねる項目からなっているので、「教師のサポート認知」因子と命名した。第2因子は、成績や授業について求められているものを尋ねる項目からなっているので、「学習上の努力要請認知」因子と命名した。第3因子は、全て友人に関することについて尋ねる項目からなっているので、「友人とのつながり認知」因子と命名した。信頼性係数はそれぞれ $\alpha = .892, .866, .838$ であり、十分な内的整合性が得られた。因子間相関は3因子間で中程度の正の相関が示された。

Table 5 「学校雰囲気」の因子パターン

	I	II	III	$h^2$	Mean	SD
I. 教師のサポート認知( $\alpha = .892$ )						
9.あなたが悩んでいたら、先生が励ましてくれると思う。	.962	-.033	-.041	.854	3.26	.974
7.先生があなたの気持ちをわかってくれる。	.875	-.062	.055	.754	3.20	.945
3.先生が生徒の相談にのってくれると思う。	.755	.134	-.071	.648	3.52	.981
5.生徒にわからないことがあったら先生に質問しやすい。	.637	.022	.101	.500	3.49	.994
II. 学習上の努力要請認知( $\alpha = .866$ )						
11.生徒に授業の内容をしっかり理解することを求めていると思う。	-.016	.845	.009	.706	3.90	.865
8.授業をまじめにうけることを求めていると思う。	-.012	.825	-.001	.668	3.97	.851
6.生徒に成績を上げるために努力をすることを求めていると思う。	.156	.733	-.037	.661	3.86	.890
1.生徒が一生懸命勉強することを求めていると思う。	-.052	.681	.075	.482	3.90	.914
III. 友人とのつながり認知( $\alpha = .838$ )						
12.あなたに気軽に話しかける友人がたくさんいる。	-.126	.027	.832	.624	3.78	.942
4.あなたは友人と一緒に学校生活を楽しまれていると思う。	-.021	.030	.816	.676	4.04	.881
2.友人はあなたの気持ちをわかってくれている。	.091	.030	.657	.524	3.74	.824
10.あなたは友人から好かれていると思う。	.176	-.049	.627	.494	3.36	.800
因子間相関	I	.585	.499			
	II		.540			

因子抽出法: 最尤法

回転法: プロマックス回転

### 3.7 クラスタごとの重回帰分析

高校選択要因によるクラスタごとに、学校適応を目的変数、学校雰囲気を説明変数とし

て強制投入法による重回帰分析を行った。その結果を Table 6～8 に示す。

Table 6 学校雰囲気因子による楽しみ感に対する重回帰分析

説明変数	楽しみ感				
	部活動重視群	進路重視群	通学重視群	全重視群	中庸群
教師のサポート認知	.402 **	.035	.222 *	.053	.032
学習上の努力要請認知	-.134	.259	-.161	-.185 *	.044
友人とのつながり認知	.481 **	.501 **	.738 **	.831 **	.581 **
調整済み $R^2$	.432 **	.404 **	.558 **	.584 **	.378 **

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

Table 7 学校雰囲気因子による孤立感に対する重回帰分析

説明変数	孤立感				
	部活動重視群	進路重視群	通学重視群	全重視群	中庸群
教師のサポート認知	.239 *	.324	-.034	.175	.234 **
学習上の努力要請認知	.161	-.130	-.137	.211	.037
友人とのつながり認知	-.665 **	-.561 **	-.564 **	-.694 **	-.700 **
調整済み $R^2$	.237 **	.214 **	.438 **	.243 **	.369 **

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

Table 8 学校雰囲気因子による積極性に対する重回帰分析

説明変数	積極性				
	部活動重視群	進路重視群	通学重視群	全重視群	中庸群
教師のサポート認知	.379 **	.062	.073	.038	.073
学習上の努力要請認知	-.314 *	.095	-.054	-.044	-.115
友人とのつながり認知	.591 **	.460 **	.746 **	.696 **	.436 **
調整済み $R^2$	.379 **	.248 **	.541 **	.471 **	.160 **

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

学校適応のいずれの因子を目的変数とした場合でも、クラスタごとに決定係数が大きく異なる結果となった。また、標準偏回帰係数も各クラスタによって有意になるものが異なったが、「友人とのつながり認知」はすべてのクラスタで有意となった。

#### 4. 考察

高校選択要因という高校入学前の要因でクラスタ分析をおこない、5 クラスタに類型化した。第1～第3クラスタでは正の値の特徴以上に、負の値が特徴的であった。「部活動

重視群」であれば「進路」の因子得点が低く、「進路重視群」であれば「通学」の因子得点が低く、「通学重視群」であれば「部活動」の因子得点が低いクラスタとなった。分散分析によって、高得点クラスタの方がポジティブな学校適応因子の得点が高い傾向にあることが示される結果となった。また、「中庸群」と「部活動重視群」でも有意差が示されており、1つの高校選択要因ではなく、複数の高校選択要因を持つことの重要性が示された。岡田(2015)は、生徒は当初は新たな学校生活に混乱しているが、学校生活の中でうまく振る舞える領域を見出し、それをアンカーポイントとすることで学校生活を体制化していく、と述べている。高校選択要因が高校入学後のアンカーポイントとなる領域と重なれば、その後の高校生活は適応的に送ることができる可能性は高まるが、一方で、高校選択要因がアンカーポイントとならないことも十分に考えられる。そのような場合に、複数の高校選択要因を持っていることで、複数の領域でアンカーポイントとして機能する可能性が広がり、適応的な高校生活を送る足がかりとなる。中学3年次に十分な情報を得て、複数の高校選択要因を持つことの重要性が示唆された。また、高校側も1つの側面を押し出すのではなく、複数の側面を開示し、選択要因を増やすことが必要である。

「孤立感」に関しては、高校選択要因によるクラスタ間での有意差はみられなかった。学校選択要因の得点が高いと適応得点も高い傾向にあるが、学校選択要因の得点が低いと不適応得点が高いとはならないことが示された。このことから、入学前要因と学校適応のネガティブな側面は関連が弱いと考えられる。入学前に得た情報より、入学後の学校生活に「孤立感」は影響を受けていると言える。大久保(2010)の指摘する「適応の対極が不適応なのではなく、適応の失敗が不適応」ということを支持する結果となった。

クラスタごとの重回帰分析では、「楽しみ感」を目的変数とした場合、「全重視群」で  $R^2 = .584$ 、「通学重視群」で  $R^2 = .558$  となり、高い予測値が得られた。両群とも「友人とのつながり認知」との関連が強く、周囲にいる友人に対する認知が重要であることが示された。「部活動重視群」と「進路重視群」を比較すると、 $R^2 = .432$ 、 $R^2 = .404$  となっており、近い予測値となっている。しかし、関連する変数には違いがある。「部活動重視群」では「教師のサポート認知」が有意に関連しているが、「進路重視群」では有意になっていない。部活動も進路も教師からのサポートは不可欠であると考えられるが、部活動の方がより教師との関係を認知する場面が多くあり、強く関連していると考えられる。部活動は学校でしかできないことがほとんどなのに対し、進路に関連することは学校外の場所とも関連する。

さらに、「進路重視群」では「学習上の努力要請認知」が有意に関連すると予想したが、有意とはならなかった。「学習上の努力要請認知」が有意になっている「全重視群」と比較すると、「全重視群」では $\beta$ の値は負の値となっているが、「進路重視群」では正の値となっている。有意な値とはなっていないものの、他クラスとは異なる関連をしていることから、今後さらに検討していく必要がある項目となった。

「積極性」では「通学重視群」の決定係数が他クラスより高く、 $R^2 = .541$ であった。「友人とのつながり認知」のみが有意に関連しており、クラスの特徴が表れた分析結果となった。「通学重視群」は高校選択要因の「通学」因子の質問項目からわかるように通学にかかる時間や、通学方法を重視している群であり、さらに「部活動」の得点が低いという特徴がある。そのため、「部活動重視群」では有意に関連している「教師のサポート認知」や「学習上の努力要請認知」は有意でなく、「友人とのつながり認知」が強く関連する結果となっている。また、「進路重視群」「中庸群」の決定係数はそれぞれ $R^2 = .248$ ,  $R^2 = .160$ と他クラスと比べ低い結果となった。この2群では本調査では計測できていない別の変数が大きく関連していると考えられる。

「孤立感」でも「通学重視群」の決定係数が $R^2 = .438$ と他クラスと比較して最も大きかった。 $\beta$ の値は全変数で負の値で関連しており、孤立感を低くするために、友人とのつながり認知を始めとした学校生活の諸領域の認知を上げることが有効であると言える。また、「中庸群」では他の学校適応因子の時とは異なり、2番目に高い決定係数となった。「友人とのつながり認知」が負の値で最大の関連変数となっているのは他のクラスと同じであるが、「教師のサポート認知」は正の値で有意に関連する結果が示された。「教師のサポート認知」が高いことは「孤立感」を低減しそうであるが、ここでは因果関係が反対になっている可能性も考えなくてはならない。つまり、「孤立感」が高いため身近でサポートをしてくれている教師を高く認知し、正の値で有意に関連する結果となったとも解釈できる。

学校適応への重回帰分析結果から、「友人とのつながり認知」は全クラスで重要な要因であることが分かった。藤原・河村(2015)では、高校生における学校適応について友人関係形成意欲と学習意欲は、バランスよく高いことが重要であると指摘しており、この論を支持する結果となった。「部活動重視群」ではこれに加え、「教師のサポート認知」が高校生活を適応的に過ごすうえで重要な要因になっている。「進路重視群」以外のクラスでは

「学習上の努力要請認知」は学校適応とマイナス方向に関連しており学習上の指導に注意する必要が示された。

高校選択は永作・新井(2005)の指摘するように、多くの生徒たちにとって生れて初めての進路選択をした結果である。多様な選択肢の中から高校選択をするということが、その後の学校適応に関連しているということを統計的に示すことができたことは、中学校での進路指導、高校の情報開示の重要性を再認識することにつながると考えられる。一方で、各クラスで本調査では測定できていない要因が関連することも示され、今後生徒のタイプにあった適応への支援を考えるうえで、より多角的な視点から学校生活をとらえ検討していく必要がある。

### 謝辞

調査に協力して下さった生徒の皆様、学校関係者の方々に御礼申し上げます。

### 5.引用文献

- 藤原和政・河村茂雄 (2015). 高校生における学校適応と友人関係形成意欲、学習意欲との関連 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, **22-2**, 73-82
- 古市裕一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究収録, **96**, 105-113
- 河村茂雄 (1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足感尺度(高校生用)の作成— 岩手大学教育学部研究年報, **59**, 111-120
- 文部科学省 (2020). 学校基本調査 政府統計の総合窓口(e-Stat) <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528> 《2020年12月22日取得》
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2020). 令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
- 永作稔・新井邦二郎 (2005). 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, **53**, 516-528
- 岡田有司 (2015). 中学生の学校適応 ナカニシヤ出版

大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, **53**, 307-319

大久保智生 (2010). 青年の学校適応に関する研究 関係論的アプローチによる検討 ナカニシヤ出版

大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応感尺度作成の試み—個人—環境の適合性の視点から— パーソナリティ研究, **12**, 38-39

清水裕 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73

山田智之 (2014). 中学校3年生の自律的高校進学動機の変容 キャリア教育研究, **33**, 1-10

山本奨 (2011). 高校選択時に必要とされる進路情報に関する研究 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **10**, 175-185